

「心の目を開いて」

(エペソの信徒への手紙 1 の 17-18)

栄光の源である御父(神)が、あなた方に、知恵と啓示の霊を与え、神を深く知ることができるようにし、心の目を開いてくださるよう。

I keep asking that the glorious Father, may give you the Spirit of wisdom and revelation, so that you may know him better.

I pray also that the eyes of your heart may be enlightened.

心の目の重要性、それはキリスト教信仰にかかわらず一般的にも、よく言われることである。体の目と異なる、心の目がある。人間を見る場合でも、表面的なこと—容貌や、衣服や車、家などの持ち物、社会的地位等々で判断するのではなく、心の目で見なければわからないといったことは、だれでも耳にしてきたことだろう。大切なものは心の目で見なければ見えない、本当に美しいものは、ふつうの目では見えない…ということは、サンテグジュペリの「星の王子さま」にも出てくる。

聖書のこの箇所が言おうとしているのは、こうした一般的にも知られていることとどこが違うのか。一般に言われていることは、人間の考え方を改めるといった努力とか教養や教育などによって心の目が見えるようになると思われているが、聖書において言われているのは、そうした人間的な努力などによって、本当の心の目が見えるようにはならないということなのである。

愛の神、万能の神がおられるということは、人間の努力とか学問、教養では全くわからない。たくさん本を読み、人生経験をしたからといって、生きて働く神がおられる、ということがわかるようになる、というものでもない。それは、この聖書の言葉にあるように、神からの賜物であり、神が聖なる霊を与えることによって、心の目が開かれるのである。

私自身の経験としても、小中高校、そして大学と学びを続け、多くの本を読んでもまったく心の目は開けなかった。周囲を見ても、大学の教授たちも、学生たちも、日夜研究や勉学に励んでいるからといって、心の目が開いているというような人には 21 歳になるまで出会ったことがなかった。心の目で見なければ決して見えない愛の神のことを語る人は、ただの一人も私の周囲にはいなかった。

神の存在とその愛など、最も大切なものは、まさに心の目で見なければ分からない。そしてそのような目を開いてくれるのは、学校、大学などの教養や研究などではなかったのであり、むしろそうした学問

や教養によって心の目が曇らされて愛の神がおられることがますます分からなくなっていく、という人たちも多い。

主イエスが、幼な子のような心にならなければ、あるいは新しく生まれなければ、神の国は見えない、そこに入れない、と言われたのもそのことである。(ヨハネ 3:3、ルカ 18:17)

そして、深い教養や学識がなかったら心の目が開けないというのなら、それはごく一部の人でか与えられないことである。しかし、学問があろうとなかろうと、苦しみのさなかにあっても、あるいは元気で働いている人にも、ただ幼な子のような心で神を信じ、仰ぐことによって、そしてただ心から求めるだけで、神からの聖なる霊を受けて心の目が開かれていくことが聖書では約束されている。それによって、この世界に流れている真実が見え、また死後、無になるのではなく、キリストのように清められたものとさせていただけることなどがわかる(心の目で見える)ようにしてくださる。これこそは万人に開かれた道なのである。



駒ヶ岳と大沼(北海道) 2011.7.21

北海道の西南部の瀬棚での聖書集会に行く途中、国道近くにあった大沼国定公園に立ち寄りました。長距離にわたる車での移動では体調が不全となりがちなので、ときどき車をおりて 歩くようにしています。歩きながら次の目的地での聖書の内容などを考えることができ、また付近の植物などを調べることができます。

この駒ヶ岳は、列車で函館から北海道に入ったときに目に入ってくる山で、標高 1131m、山麓には、噴火によって川がせき止められてで

きた湖である大沼、小沼などの湖沼が、写真のように広がっています。

この駒ヶ岳には、今から 46 年前、私が大学生のときに、テントや食料などを持って、大雪山や知床半島の羅臼岳などほとんど山ばかりを目指した旅をしたことがあり、この山にも、大沼駅から何時間もかけて登ったのが強く印象に残っています。その頃は、この付近にほとんど観光客もおらず、駅から降りて、一人で遠くの駒ヶ岳目指して歩き始めたのでした。

現在では、大沼のいろいろな小さな島になっているところに橋が付けられてあり、植物を観察しつつ、湖、沼とときどき見え隠れするこの駒ヶ岳を見ながら歩くことができます。

湖では、この写真の右下には、スイレンの花、そして別のところには、コウホネが黄色い花を咲かせていました。

この駒ヶ岳は、かつては富士山のような山容で高さも 1700m ほどあったけれども、江戸時代初期の大噴火によって崩れ落ちて現在のようになったとのことで、大沼から見る山容は、優美ですが、別の地域からみると、同じ山とは思えない荒々しい男性的な山容を見せています。

この付近が訪れるものの心を惹くのは、こうした優美さと力強さ、そして湖にたたえられた水のうるおい、植物や水鳥たちが溶け合って自然のよさを感じさせてくれるからです。

湖に満ちる水は、主イエスの言われたいのちの水を思い起こさせ、優美さはキリストのこまやかな愛を、そして山の力強さと泰然たる姿に接して、それを創造された神の力強さが思いだされます。そして青い空、白い雲も、神のかぎりなく大きい御手のわざへと心を誘ってくれます。

湖面のさざなみも、無音のメロディーを奏でているのです。自然は私たちが心を静めて接するほどにさまざまな天の国の賜物を与えてくれるものです。 （写真、文: T.YOSHIMURA ）

---